

琵琶湖疏水について

疏水さんぽ

琵琶湖疏水の魅力と歴史を訪ねる

名所がたくさん！

さあ疏水さんぽにでかけよう！

ホーム > 琵琶湖疏水について

> 伏見さんぽ

琵琶湖疏水とは

> 岡崎・蹴上さんぽ

> モデルコース

> 大津・山科さんぽ

京都の偉大な産業遺産である「琵琶湖疏水」
> モデルコース

は、大津市観音寺から京都市伏見区堀詰町まで
記念館について

の全長約20kmの「第1疏水」、全線トンネルで
展示・資料

第1疏水の北側を並行する全長約7.4kmの「第2
> 主な所蔵資料

白川に至る全長約3.3kmの「疏水分線」などから
> 刊行物・オリジナルグッズなど
構成され、今も現役で活躍している施設です。

利用案内・アクセス

サイトポリシー



明治維新後、東京遷都により人口が減少し衰退した京都を憂えた第3代京都府知事の北垣国道は、復興策として琵琶湖から水を引き、その水の力で産業振興を図る「琵琶湖疏水」の建設を計画しました。

東京の工部大学校（現在の東京大学工学部）を卒業したばかりの田邊朔郎などとともに着手した工事は、4年8箇月の歳月を費やして明治23（1890）年に完成します。琵琶湖疏水を活用し

た水力発電や水車動力は産業を大きく発展させ、舟運により人や物の行き来が盛んになるなど、京都は新たな活力を得ることとなりました。

田邊 朔郎

それから20年後には、さらに豊かな水を求めて第2疏水を建設し、上水道を整備しました。また、道路幅を広げ、市営電車を日本で初めて開業をしたことで、今日の京都のまちづくりの基礎ができあがりました。120余年の時を経て、琵琶湖疏水は今なお京都に命の水をもたらし続けているのです。

第1・第2疏水の合流点

琵琶湖疏水の歴史

明治

明治14（1881）年に第3代京都府知事に就任した北垣国道は、幕末の戦災と明治維新による事実上の東京遷都により衰退した京都を復興させるため、琵琶湖から引いた疏水の水力で新しい工場を興し、舟で物資の行き来を盛んにしようと計画しました。そして、琵琶湖疏水の工事に関する卒業論文を作成して工部大学校を卒業したばかりの田邊朔郎を主任技師に採用するなどの準備を進めます。

シャフト工場 上部土石運搬（田村宗立 筆）

この頃の日本の重大な土木工事は外国人技師の設計監督に委ねられていましたが、琵琶湖疏水の建設はすべてを日本人の手によって行った日本最初の大土木事業でした。工事は明治18

（1885）年に始まり、乏しい資材やほぼ人力による作業など、苦難も多くありましたが、我が国で初めて豎坑を利用した工法を採用するなど、技術的な工夫を行いながら、5年後の明治23（1890）年に完成しました。

煉瓦製造所 山科御陵村（田村宗立 筆）

第1疏水の完成と合わせて、日本で最初の事業用水力発電所として「蹴上発電所」が建設され、疏水の水を使って発電し、電燈や工場動力に利用されました（電気事業）。また、運河を開さくし、大津や伏見、大阪との間で米・炭・木材・石材などが舟で運搬されるとともに、観光客を乗せた遊覧船も多く行き交いました（舟運事業）。そのほか、精米や紡績などにも利用される（水力事業）とともに、東本願寺や京都御所では防火用として、南禅寺界隈の別荘群で

蹴上船溜とドラム工場（明治26（1893）年）

は庭園用水として、疏水の水を引き込みました。

一方、明治30年代に入ると、第1疏水の流量では毎年増大する電力の需要が満たせなくなり、また、地下水に頼っていた市民の飲料水が質・量ともに問題となってきました。そのため第2代京都市長西郷菊次郎（西郷隆盛の長男）は、三大事業（第2疏水の建設と上水道の整備・道路拡築・電気軌道の敷設）を実施しました。第2疏水建設は三大事業の中核として、全線トンネルの疏水を第1疏水の隣に引くもので、明治41（1908）年に着工し、明治45（1912）年に完成しました。また、同時に第2疏水から取水する日本最初の急速ろ過方式を採用した蹴上浄水場が完成し、京都市の水道事業が誕生しました。

西郷 菊次郎

蹴上浄水場 上水池全景（明治45（1912）年5月10日）

蹴上浄水場 ろ過場内部（明治45（1912）年3月26日）

水道事業については、水道創設当時の京都市の人口は約50万人、このうち給水人口は約4万人で普及率は8％程度でしたが、その後の市域拡大等による利用者と水の使用量の増大に対応するために、大正の終わりから平成に

かけて8期にわたる拡張事業を実施し、現在の普及率は99%を超えています。

大 正

初期の京都市電車両（明治45年5月10日）

拡張後の四条通 四条烏丸から東を望む（明治45年5月10日）

第2疏水の開さくに伴い、流量が増加したため、蹴上から下流の第1疏水は現在のように拡張されました。また、第二期蹴上・夷川・墨染（当時は伏見と呼称）の3つの発電所が新設され、発電量が約4倍に増加しました。この電氣を用いて、道路拡張によって新しく広げられた幹線道路に市電を走らせました。その一方で、鉄道をはじめとする陸上交通が飛躍的に発展したこともあり、舟運は徐々にその数を減らし、大津・京都間の足としての機能は失われるとともに、貨物輸送が主体となっていました。

昭 和

第1トンネル 内部での作業風景（昭和40年代）

昭和に入ると舟運の貨物量はさらに減少し、昭和23（1948）年に蹴上インクラインが休止、昭和26（1951）年9月をもって疏水の舟運は長期にわたり途絶えることとなりました。

また、電力事業については、戦時中の配電統制令により昭和17（1942）年に京都市から関西配電（現在の関西電力）に移管されましたが、蹴上・夷川・墨染（旧伏見）の3水力発電所は現在も現役施設として稼働しています。

琵琶湖疏水に関しては、昭和20年頃からひんぱんに改修工事を行ってきましたが、昭和43

（1968）年から昭和49（1974）年までの間は導水路整備事業として、老朽化していた大津から蹴上までの間の第1・第2疏水全線にわたり大規模な改修を行いました（昭和の大改修）。

また、昭和45（1970）年には、国鉄（当時）の湖西線建設に伴う対応のため、新たに山科区四ノ宮船溜から安朱までの区間に諸羽トンネルが建設され、疏水路の付替えを行いました。

一方、昭和40年代頃からは、現役施設である琵琶湖疏水の歴史的な価値についても注目されるようになってきました。そのような流れの中で、「哲学の道」をはじめとする疏水分線沿線の整備や蹴上インクラインの復元、東山緑地公園（山科区）の整備等が行われました。その後、昭和58（1983）年には水路閣及びインクラインが京都市の史跡に指定され、さらに平成8（1996）年には、これらを含む琵琶湖疏水関連施設12箇所が国の史跡に指定されました。

平成

第2 疏水連絡トンネル立杭工事（大津市観音寺）

第2 疏水連絡トンネル藤尾山岳トンネル作業基地

平成11（1999）年には、水道水源である第2 疏水の取水対策として、第1疏水より約20メートル深い位置に新たに第2 疏水連絡トンネル（バイパストンネル）を建設し、水道原水の安定供給の強化を図りました。そして現在も、日々適切な維持管理を行いながら、豊かで美しい水を保つための努力を続けています。

琵琶湖疏水船

旧御所水道ポンプ室

平成27（2015）年、「琵琶湖疏水通船復活試行事業」として、琵琶湖疏水舟下り実行委員会による大津・山科・

蹴上間の試験運航が始まりました。そして、平成30
(2018)年3月には、昭和26(1951)年にいったん途
絶えていた琵琶湖疏水の舟運が67年ぶりに復活し、新た
に設置された「琵琶湖疏水沿線魅力創造協議会」の主催
により「琵琶湖疏水通船事業」がスタートしました。

蹴上インクライン下のトンネル・ねじりまんぼの扁額に
は、北垣国道による落款「楽百年之夢」があります。明
治の先人が100年先を見通して数多くの苦難を乗り越え
完成させた琵琶湖疏水は、時代とともに大きく用途を変
化させながらも、その都度新たな価値をかたちづくり、
120余年にわたって変わることなく京都の水を守り、支
え続けています。

水道事業の年表はこちら [1.1MB]



NEWS

ニュース一覧

琵琶湖疏水について

琵琶湖疏水とは

琵琶湖疏水の歴史

疏水さんぽ

伏見さんぽ

岡崎・蹴上さんぽ

大津・山科さんぽ

記念館について

展示・資料

主な所蔵資料

刊行物・オリジナルグッズなど

利用案内・アクセス

サイトポリシー

琵琶湖疏水記念館

〒606-8437 京都市左京区南禅寺草川町17

TEL 075-752-2530 FAX 075-752-2532

(c) 2018 City of Kyoto. All rights reserved.